

中心市街地における オープン・アトリエ・ワークショップの試み

栗田真司⁽¹⁾

1. はじめに

1-1. 研究目的

地域活性化やまちづくりは、現在の生涯学習にとって学ぶべきあるいは実践すべき中核的なコンテンツとなっている。こうした状況に先鞭をつけたのは、全国で最初に生涯学習都市宣言を行った静岡県掛川市の「掛川学事始」（1979年～）とそれに続く掛川市「とはなにか学舎」であろう。ここから日本の地域学が始まったと言っても過言ではない。掛川市長だった榛村純一の「ないものねだり」ではなく「あるもの活かし」という地域資源活用の考え方は、現在でも地域活性化やまちづくりの鍵となる概念に挙げられている。

それに続き、1988年、当時の文部省生涯学習局は、「生涯学習のまちづくり事業」を始め、学社連携、ボランティア育成、サークルづくりなどの市町村モデル事業に補助金を拠出した。10年間に渡って続けられたこの事業によって、まちづくりが生涯学習と重なる活動であることを社会に周知させた。

その後、1998年の「中心市街地における市街地の整備改善及び商業等の活性化の一体的推進に関する法律」の制定によって、各地で中心市街地活性化基本計画の策定が行われることになるが、その過程で住民参加型のワークショップや地域学講座が開催されることになる。この出来事も地域活性化と生涯学習の結びつきを強化することに貢献した。例えば、静岡県富士宮市では、1999年に一般市民を対象としたまちづくりワークショップが開催され、ワークショップの終了後に集まった13名の市民が見出した地域資源が「富士宮やきそば」である。その後、富士宮やきそば学会へと発展し、富士宮市では、やきそばを介して生涯学習と地域振興が一体化することになる。

さらに、2006年に教育基本法が改正され、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」という「生涯学習の理念」（第3条）が新たに規定された。生涯学習の成果を地域参画・社会貢献に生かすことが明記されたのである。

2013年に山梨県では、国民文化祭が開催された。従来のイベント型催事であった国

民文化祭は、303日間の開催という新展開によって、生涯学習と地域活性化を結びつける方向へと舵を切った。その具体的な方略の一つが中心市街地におけるオープン・アトリエ型ワークショップ「いいことかんがえた！」の開催である。

本研究の目的は、地域活性化を意図して開催された中心市街地におけるオープン・アトリエ型ワークショップの特性と課題を検討することである。

1-2. 国民文化祭について

今回のオープン・アトリエ・ワークショップは、第28回国民文化祭の催しとして開催された。最初に、国民文化祭について概観することにする。

国体（国民体育大会）は、1946年に第1回が開催され、2015年の和歌山「紀の国わかやま国体」で70回目を迎える我が国最大のスポーツの祭典である。それに対して国民文化祭は、文化の国体として、かつて文化庁長官であった三浦朱門が提唱し、1986年に第1回大会が行われた美術や音楽や演劇などの文化の祭典である。国文祭と略称されることもある。国体と同じように毎年各都道府県の持ち回りの開催で、2011は京都府で開催され、2012年は徳島県、2013年は山梨県で開催された⁽²⁾。通常、秋に10日から2週間ほどに渡って開催されることになっているが、山梨大会は、2013年1月12日（土）から11月10日（日）までの303日間という長期開催をする初めての国民文化祭となった。

期間が長いので、様々な新しい試みがなされた。一番の目玉事業は、1年を通して日常的に展開される通期事業の開催である。山梨大会の通期事業は、4本の内容からなるが、「フットパス」、「まちなかステージ」、「食のカレンダー」とともに「造形遊び」がその4本柱の一つとなった。国が主催する事業に「造形遊び」という名称が用いられたのは、初めてのことである。

2. 中心市街地活性化施設としての山梨県立図書館

2-1. 山梨県立図書館

次に、今回のオープン・アトリエ・ワークショップの会場となった山梨県立図書館についてである。山梨県立図書館（通称：かいぶらり）は、2008年11月11日に中心市街地の活性化に関する法律（平成10年6月3日法律第92号）による認定を受けた甲府駅の北口および南口の整備事業「甲府市中心市街地活性化基本計画」に沿って計画されたものの一つである。シビックコア（Civic Core）地区整備計画にも策定されている。甲府駅の北口は、中心市街地活性化の切り札として度々開発計画が策定されてきたが、その度にバブルの崩壊などによって計画が頓挫し、駅前の広大な土地が更地のままと

いう異常な事態が長年に渡って続いていた。

そんな中で山梨県立図書館は、「甲府市中心市街地活性化基本計画」の中柱的存在として位置付けられている。今回の計画も、当初は、県庁所在地である甲府駅前に高度情報通信産業拠点施設、新県立図書館、生涯学習拠点施設、大学コンソーシアム、レストランなどの商業施設などを併設する官民協働のPPP方式（Public-Private Partnership）による複合型施設として計画されたが、2008年のアメリカのリーマン・ブラザーズの破綻に端を発する世界的金融危機によって、参画予定だった有力民間企業がプロジェクトから撤退し、図書館単体で開館することに計画が変更された。

単体設置となった山梨県立図書館は、長野オリンピックのエムウェーブや恵比寿ガーデンプレイスをデザインした株式会社久米設計の設計によって2012年11月にJR甲府駅北口に開館した。延床面積は、10,452m²、蔵書数は、約82万冊である。地下化する計画もあった駐車場は、高度情報拠点施設の予定地に設置された。さらに甲府駅から1段も階段なく、車椅子でも図書館2階に入ることができ、雨天でも駅から傘をささずに図書館に入ることができるはずだったペDESTリアン・デッキもセキュリティその他の問題により図書館手前で地上へ降りる階段が設置されることとなった。

しかし、JR甲府駅北口徒歩1分という立地条件により、複合施設計画にあった中心市街地活性化の拠点としての交流機能と観光拠点機能をも合わせ持つ図書館が計画された。本と人を結びつける施設であると同時に、人と人を結びつけ、交流を促し、にぎわいを創出する「知的活動の拠点」となる図書館を目指している。具体的にはイベント・スペース、多目的ホール、交流ルームがその役割を担う。特にガラス張りの交流ルームは6室あり、そのうち2室は、防音室であるため楽器の練習をする利用者などにも対応できる。利用料金も1時間あたり100円からと安価である。また、出力105kWの太陽光パネルの設置や650m²の緑化カーテン・ウォールを採用するなど、環境負荷の低減にも配慮されている。

2-2. イベント・スペース

山梨県立図書館1階の正面入口脇に、今回の会場となったイベント・スペースがある。長方形で、29.4m（東西）×17.0m（南北）、床面積は、476m²、収容人員は497名である。終日利用の料金は、21,500円である。平面図からもわかるように、イベント・スペースは、JR甲府駅直近のメインエントランスに面した山梨県立図書館でも人目を引く場所にある。

今回のオープン・アトリエは、ちょうど30日間休みなくワークショップが開催されたため、会場の借用料金だけでも645,000円が必要ということになる。今回は、国民文化祭という文化庁主催のイベントであるため国からの補助金をあてがうことができたが、通常、一般の団体が用意できる金額ではない。

他の会場候補として、山梨県立美術館があったが、制度上、30日間連続で施設を借用し続けることはできなかった。他の類する公立施設も同様であった。シャッター通りとなった空き店舗についても検討したが、越えなければならない契約問題が複数あり、実現することはなかった。

山梨県立図書館の指定管理者である山梨文化会館・甲府ビルサービス・NTT ファシリティーズ共同事業体の担当者に対して事業説明を行ったが、その際に指定管理者側から絵の具やマーカーを使用しないでほしいという要望が示された。また会場の床がカーペットであるため養生してほしい、できれば全面ガラスの南面とその他3面の白壁面も養生してほしいという要望が示された。これを受けて検討した結果、イベント・スペースの東側半面のみ創作スペースとして養生することになった。養生に要する費用は、国民文化祭の主催事業であるため国民文化祭実行委員会から支出されることとなった。



図1. 山梨県立図書館1階平面図

- ①児童カウンター ②よむよむスペース ③子ども読書研究コーナー ④視聴覚ブース ⑤新聞・雑誌コーナー ⑥サービスカウンター ⑦予約資料受取コーナー ⑧パソコンコーナー (2カ所) ⑨総合案内 ⑩地域情報コーナー ⑪返却ポスト ⑫カフェ ⑬イベント・スペース ⑭交流ルーム (101・102・103・104) ※2階にも交流ルームや多目的ホールがある。

3. 造形遊び

3-1. 小学校図画工作科における造形遊び

図画工作は、1866年（慶応2年）にフィンランドで初めて学校教育の教科として採用されたと言われている。日本では、江戸時代の最末期にあたる。しかし、日本においても1872年（明治5年）の学制の発布とともに上等小学（高学年）に「幾何学罫画大意」があり、その他事情によって設けても良いという科目に「画学」があった。世界で最初に図画工作科を始めたフィンランドのわずか6年後のことである。フィンランドは、スウェーデンとともに現在でも図画工作科の実施授業時数が世界屈指である。義務教育から図画工作科が消滅した国も多数あるが、日本の図画工作科の実施時間数は、OECDの加盟国の中でも上位である。しかし、図画工作科が、社会生活で役立つ教科であるという認識は、一般社会では希薄である。将来に役立つ学習ではなく遊びや趣味の世界と同様であると認識する子どもや保護者も存在する。実際に自宅での生活の潤いのために油絵や版画を購入する人は稀であろう。しかし、美術は、美術館にだけ存在するものではない。家具や衣類など生活で用いる品物すべてが美術作品である。車、オートバイ、時計、アニメーションなど日本製品が海外で評価されているのは、図画工作科で培われた日本人の資質や能力の賜物である。

この図画工作科に1977年の学習指導要領の改訂で大変革が起きる。絵画、彫塑、デザイン、工作、鑑賞という5領域から表現と鑑賞という2領域に集約され、それと同時に絵画が「絵に表す」に彫塑が「立体に表す」に、デザインが「表したいことを表す」、工作が「つくりたいものをつくる」に変更される。さらにそれまで存在しなかった「造形遊び」が低学年限定で突如登場するのである。その後、造形遊びは、改訂の度に中学年、高学年へと対象学年を広げ、現在にいたっている。一方で、「絵に表す」、「立体に表す」、「工作に表す」は、「絵や立体や工作に表す」と一つの内容に包括された。図画工作というと、絵ばかり描いていた印象を持っている人が少ないが、その主役の座は、ここ2、30年の間に絵から造形遊びへと移っているのである。

造形遊びの創始、開発に尽力し、その後、文部科学省の教科調査官や視学官を務めた板良敷敏は、

「造形遊びの趣旨は、子どもたちの知が働く実相を基盤にした造形活動です。この内容では、子どもたちがもてる力を総動員して、対象に働きかけ、手など体全体の感覚を働かせ、形や色・材料・場所・環境といった身近な対象や日常の空間に働きかける総合的な造形活動ということです⁽³⁾。」

と述べている。形や色・材料・場所・環境といった身近な対象や日常の空間に主体



図2. ブタクサの茎による作品



図3. 石を積み上げた作品

的に働きかけるといった点が特徴であろう。

また、工作との違いがしばしば指摘されるが、出来上がった作品にはさほどの違いはない。異なるのは制作過程である。教師が「今日はロボットをつくりましょう」と制約を設定して、全員がロボットをつくるのが工作である。それに対して「ここに材料があります。これで何ができるかな」と子ども自身につくるものを考えさせ、材料や場所や環境の特性を考慮しながら一人一人が違う作品や活動をするのが造形遊びである。落ちていた木の枝を見て何かにみため、それを出発点に創作する活動である。

ここでは、準備する材料が重要になるが、時には、水や光や風さえも材料となる。並べたり積んだりするだけで、持ち帰るような作品ができないこともある。

今回は、国民文化祭でこの造形遊びという用語を用いることによって、芸術文化の新たな展開を周知するという啓蒙的な意図も存在していた。

造形遊びに関しては、イギリスの芸術家アンディ・ゴールズワージーがロールモデルとされる存在である（図2、図3はゴールズワージーの作品）。彼は、野山や海岸に分け入り、枝や葉、石、氷などの材料と向き合い、自分の手だけで作品を制作して行く。接着などもしない。例えば、木の枝はとげで固定する。彼の作品は、小学校図画工作科の教科書にも度々登場し、子どもたちと造形遊びをつなぐ役割を果たしている。

3-2. 国民文化祭造形遊び部会

国民文化祭の造形遊び事業の実施に関しては、造形遊び部会という委員会が立ち上げられ、企画や運営について検討することになった。その結果、造形遊びの事業は、次の5つの事業を実施することになった。

- ①「みんなで造形遊び」：大人数や学校単位で造形遊びをして展示する。また通りがかりの鑑賞者が参加して作品の数が増えていく、あるいは大きくなっていくような活動である。

- ②「いつでも造形遊び」：山梨県立図書館「かいぶらり」のイベントホールにおいて、夏休みの1ヶ月間オープン・アトリエ形式のワークショップ「いいことかんがえた！」を開催する。(今回報告する内容である。)
- ③「どこでも造形遊び」：県内のさまざまな場所で短期間の造形遊びワークショップを開催するアウトリーチ活動である。
- ④「まちなか美術館」：美術館・ギャラリーだけでなく、まちなかのあらゆる場所を「まちなか美術館」と位置付け展示や催しを行う。
- ⑤「おどろき造形遊び」：甲府駅周辺の公共空間でアーティストが「造形遊び」を公開制作し、期間中は作品を展示する。

その他にも、地域で継続的な活動となっている伝承物づくりや稲わらアート、空き缶アート、リゾナーレ八ヶ岳の花びら絵、かかしフェスティバル、田んぼアートなどを「造形遊び」として位置付け、制作・展示・記録の支援を行うこと、文部科学省の「造形遊び」担当者を招聘して「造形遊びフォーラム」を実施すること、甲府駅前でプロジェクト・マッピング、山梨県内の身近な造形遊びを「ツイート mapping」にすることで、造形遊びの空撮などが提案されたが、各々にさまざまな課題があり実現にはいたらなかった。

ここでは、②の「いつでも造形遊び」を中心に報告するが、①の「みんなで造形遊び」、③の「どこでも造形遊び」、④の「まちなか美術館」に関してもお祭り会場、公園、ショッピングセンターなどのパブリックスペースなどが造形遊びの会場に変身し、観光客や地域住民に「造形遊び」を認識してもらうことに役立った。

そして、最も反響があったのは、⑤の「おどろき造形遊び」である。ドイツからまちなかの道路などに錯視画を描く3Dアーティストのエドガー・ミュラーを招聘し、山梨県立美術館と山梨県立文学館の間の広場に「富士山への賛辞」(図4)という作品が公開制作された。2013年8月26日には、Yahoo Japan のトップページの画像ニュースとして掲載されるなど多くのパブリシティ露出があったが、山梨県が保持する様々な制約によって、国民文化祭の会期後には、撤去されることになった。海外のエドガー・ミュラーの作品は、恒久的に保存され、海外からの観光客を呼び込む貴重な観光資源となっているが、これを保持することができなかったのは、現在の山梨県の文化振興行政の実状である。山梨県の文化行政担当者、美術館に関わる担当者の中に、こうした文化遺産の恒久的な保存に反対する立場を取った人たちがいた。本来、芸術家や芸術作品に寄り添う立場にあるものが、規則があるから、前例がないからなどの理由でこうした見解を示したことは、特筆すべき事態であった。

同様に、JR 甲府駅北口のよっちゃばれ広場に制作された國安孝昌の「龍の雷神」(図5)は、丸太を針金で結んだダイナミックな造形作品であるが、会期中、「テレビのニュースで見て実物が見たくなって」と東京から山梨に来た人たちが作品の前で



図4. 「富士山への賛辞」



図5. 「龍の雷神」 ※右側に山梨県立図書館

写真を撮る姿がしばしば見られた。一方で、市民から様々な意見が寄せられた。県内在住の建築家が構造的な危険性を指摘したり、一般市民が丸太に包まれた樹木のことを心配したりするなどの意見である。

山梨県における国民文化祭は、成功裡に終わったが、芸術文化と地域社会は、まだ馴染んでいるとは言えない状況にある。良好な関係構築を阻んでいる規制や慣習は多い。京都府、静岡市、浜松市、川崎市、福岡市、船橋市、岡崎市などの制度を参考にしながら、日常的な活動の積み重ねが今後も必要であろう。

4. オープン・アトリエ・ワークショップ「いいことかんがえた！」

4-1. オープン・アトリエ

オープン・アトリエとは、いつ来ても、誰が来ても来館者に活動の場を提供する生涯学習や社会教育の活動形式である。1981年に開館した宮城県美術館は、鑑賞活動とともに創作活動に力を入れている。ここでは、オープン・アトリエと称して入館者に創作室を開放しており、複数の教育普及活動担当者が常駐して学習支援にあたっている。利用者は、随時広い創作室に配置された用具などを用いて自発的な創作活動を行うが、担当者は、必要に応じて助言や支援行為を行う。主体的な生涯学習活動とそれを支援する生涯教育担当者の関係である。

宮城県美術館の他には、2015年2月1日に閉館した青山こどもの城がある。青山こどもの城は、全国に4,000館以上ある児童館のセンター館として1985年11月に東京青山に開館した。青山こどもの城の造形スタジオで行われていた「オープン・スタジ

オ」がここで言うオープン・アトリエにあたる。英語で Open Atelier は、アーティストや工芸家が、工房を市民やバイヤーに公開することを指し、日本で言うところのオープン・アトリエは、Open Studio と呼ぶことがある。

4-2. 地域住民を対象とした催事、あるいはリピーターを意識した活動

今回の国文祭は、303日間の長期開催によって、短期間のハレ（晴れ）の舞台である祭りを長期間のケ（曇）の行事に落とし込んでしまった。非日常から日常へと国文祭を転化したと言ってもいい。こうした動向は、他の分野にも垣間見ることができる。

東京タワーは、2012年の東京スカイツリーの営業開始によって東京随一の観光名所からの転換を図っている。日曜日の早朝に開催される朝食付きの朝ヨガや日常的なライブステージの開催、1年間何度でも大展望台（150m）に昇ることができ、特別展望台（250m）にも平日限定で昇ることができる年間パスポート（タワーパス）の発行などによって、遠方からの観光客ではなく近隣地域のリピーターの獲得に力を注ぎ、脱観光名所化や気軽に地域住民が立ち寄れる普段使いの場所を目指している。

こうした動きは、全国で1,000か所を越えた道の駅にも共通する。観光客を主な対象とする道の駅は、苦境に立たされ、それに代わって地域の漁師が捕った魚や近隣住民が栽培した野菜や果実を販売し、それらを近隣住民が日常的に購入する地域住民対象の道の駅が台頭している。例えば、山口県萩市の道の駅「萩シーマーと」は、当初、都市部の観光客をコアターゲットにしていたが、その方針を撤廃し、対象を地域住民に変更した。地域住民の交流拠点となる公設市場型道の駅に変換したことで全国でも有数の業績をあげる道の駅となった⁽⁴⁾。旅行代理店による大量送客提携もしていない。一生に一度訪れる観光客ではなく、毎日訪れる地域住民のリピーターをコアターゲットにしたことが成功した例である。博物館が、展示物だけでなく、教育普及活動に力を注ぐようになってきたのも近隣住民のリピーターへとその対象を変更しているためである⁽⁵⁾。観光客から地域住民への対象者の変更が文化施設を充実させる施策となっているのである。

今回のオープン・アトリエは、観光客を主な対象とする国民文化祭の事業だが、こうした社会的状況や長期開催をすることなども考慮し、中心とする対象者は、非日常的な観光客ではなく、日常の中に生きる近隣の地域住民とすることとした。

4-3. オープン・アトリエの概要

事業名は、「オープン・アトリエ・ワークショップ『いいことかんがえた！』」である。

イベント・スペースの西側半面は、「積み並べるコーナー」とし、コルクボードの上で紙コップや積み木を積んだり、並べたりする活動をする。積んだり、並べたり、つなげたりすることも造形遊びである。小学校学習指導要領図画工作編にも造形遊び



図6. 養生を終えたイベント・スペース



図7. 外からみたイベント・スペース

の活動として位置付けられている。また、創作に取りかかることができない子どもへの動機付けとして、大きなポリ袋の風船を配置し、転がしたり、中に入ったりして戸惑う場合のきっかけづくりの一つとした。同時に広告塔の役目も担っている。この作品制作には、身延山大学の3名の学生の協力を得た。

イベント・スペースの東側半面は、「創作コーナー」とし、中央に創作テーブルを配し、一方の壁際に材料コーナー、もう一方の壁には、作品の写真を展示する幅6mのボードを配した。興味のある材料を材料コーナーで選び、好きな場所で、好きな方法でつくり、展示するものである。

会場受付には、プリンターを用意し、でき上がった作品と作者の写真を撮影して、プリンターで2枚ずつ印画紙に印刷した。2枚のうち、1枚は写真展示ボードに掲示し、1枚は持ち帰り用とした。その際に、ホームページや報告書に掲載する可能性があることを伝え、口頭で許諾を得た。概算であるが、約95%の保護者が掲載を許諾した。こうしたことを伝えることによって、関連するホームページの閲覧や検索が増加し、ホームページへの誘導を促すことにもなる。

なお、フライヤー（ちらし）などに示した内容紹介文は以下の通りである。

「身近な材料をみたり、さわったりしているうちに“いいことかんがえた！”と何かをつくりたくなることはありませんか。これが「造形遊び」です。うまくつくることよりも想像力をはたらかせて工夫する活動です。

あなたは、夏休みに何をしますか。夏休みの県立図書館が「造形遊び」の場所に変身します。期間中は、いつ来ても、だれと来ても、自由に思いっきり「造形遊び」をすることができます。つくったものは、見てもらうためにかざっておいてもいいし、持ち帰ることもできます。入場は無料です。事前に申し込む必要もありません。

さあ、時間を忘れ、夢中になってつくることを体験してみませんか。」

特に重視したのが、「時間を忘れ、夢中になってつくる」という部分である。習い

事や塾に負われる現代の子どもたちは、何時間も一つのことに夢中になって活動するという経験が乏しい。小学校の授業は、45分間で終わってしまう。夢中になって活動することは、精神的にも生理的にも有益であるが、それが不足しているのである。この点についての環境を提供しようとしたのが今回のオープン・アトリエ・ワークショップ「いいことかंगाえた！」である。

4-4. 注意書き

会期の途中から会場の入口に、以下のような注意書きを提示した。

「①ここは、図書館です。「走ったり」「さわいだり」「投げたり」することをご遠慮ください。さわりたくなるかもしれませんが迷路も風船も恐竜もお友だちがつくった作品です。大切にしましょう。

②木の積み木や紙コップの積み木は、自分の身長よりも高く積めたら写真を撮りますのでスタッフに申し出てください。

③小さなお子様には、必ず付き添いをお願いいたします。」

①については、初日に小学生がつくった段ボール迷路内で子ども二人が正面衝突するということが起きた。その後、小学生が積み木を投げあってふざけているうちにそばにいた幼児に積み木が当たったなどの問題が起きたことを受けての対応である。

②については、つくっている途中で何回も写真撮影とプリントアウトを要求する子どもたちが増え、用意した印画紙とインクがすぐになくなって買いに走らなければならないという事態が続いたため、これに対応したものである。

③については、子どもをオープン・アトリエに残して何時間も帰って来ない母親が後を絶たず、お昼過ぎに「お腹すいたー」、「ママー、どこー」と泣き叫ぶ子どもたちが出てきたためである。託児所と勘違いしているのである。こうした育児怠慢的な保護者が存在するということが社会教育活動では認識しておかなければならない。

4-5. 参加者

参加者は、母親と子どもの親子連れが圧倒的に多かった。その他、両親と子ども、祖父母と孫、祖父母と親と子ども、子どもだけということもあった。

最も多い親子での参加であるが、生涯学習、社会教育においては、教育的に問題があるという指摘もある。学校以外の場所で親子講座などに参加すると、保護者が干渉して、学びではなく指導になってしまうためである。参加者全員が同じ目標に向かって同じ活動をするため、保護者は、我が子と他の子どもを比較してあせり、干渉的になってしまうのである。こうした場合、「早くしなさい」、「こうしたら」、「やめなさい」などの子どもの活動にとってはネガティブな言葉掛けが会場に飛び交うことになる。本来は、干渉するのではなく、寄り添い、見守るべきである。



図8. お父さんの肩車で



図9. あちこちで展開する親子などの会話



図10. 初日に出現した長ぐつと段ボール迷路
小学校高学年の子どもたちが制作したもの



図11. 初めて出会った子どもたちが協力して



図12. 積み並べるコーナーは高学年にも人気
紙コップが崩れる音を楽しむ子どもたち



図13. この表示「土足OK」も参加者の作品
この他にもゴミ袋や場内表示をつくる子どもがいた



図14. 回転ずし
幅40cmの箱の上で回転するお寿司



図15. 5年生3人が5日かけてつくった作品
ポリ袋とセロハンテープできている



図16. こどもひみつち
ロール段ボール紙と赤いガムテープで



図17. ジンベイザメ
家族4人の共同作品



図18. テレビとリモコン



図19. ガムテープ製の電話



図20. 3時間かけて完成した
巨大ロボット



図21. プリンセス
これを着たまま帰宅



図22. 早く撮って
中に子どもが入っている



図23. 皆勤賞のメダル授与
スタッフの手作り金メダル

これに対して、造形遊びの場合には、親子で参加しても隣の子どもは、違う目標のもとで違う活動をしているため、比較すること自体が無意味である。そのため、保護者の上から目線の干渉が少なくなる。保護者自身が、創作しなくなって子どもそっちのけでつくることもある。実際に、子どものそばで夢中になってつくっていた保護者は多い。これが子どもと自分が同じ人間なのだという横から目線の対等な考えに立つことになり、結果的に子どもに寄り添う状態となる。また造形遊びにおいては、初めて出会った子ども同士が、自然に助け合い、共同してつくるという活動が頻繁にみられる。これについては、今後、教育臨床心理学的な検証が必要だが、絆が薄れているとの指摘を受ける地域の子どもたちにとっては、好ましい状況であると言える。

4-6. ボランティア・スタッフの支援内容

オープン・アトリエに参画したボランティアは、活動内容から言えば、一般ボランティアではなく、専門的な知識や技能を持ったプロフェッショナル・ボランティア（通称：プロボラ）である。そのためには、研修が欠かせないが、今回は研修会を実施する時間的余裕がなく、「運営マニュアル」を事前にボランティアに郵送し、当日、要点を説明することで対応した。しかし、ほとんどのボランティアは、運営マニュアルを読んでおらず、支援内容や方法を理解していなかった。これによって、当日、問題となることもあったが、やりながら考え、学ぶという方法で対応した。

ここに、ボランティアに配布した運営マニュアルに示した業務心得〈スタッフの皆様へお願い〉を示す。

「1. 教えるのではなく、子どもに寄り添いながら、創作の補助をすること、雰囲気作り、材料集めがスタッフの仕事になります。

2. 昭和50年代の初めから小学校の図画工作科を中心に学校では「造形遊び」が行われています。材料をもとに発想したものをつくる活動です。工作は、同じ材料で同じ制作過程で同じ作品ができあがりますが、造形遊びは、材料も制作過程も作品も一人一人違います。徹底して並べる、積むことにこだわり、作品をつくらない場合もあります。これも造形遊びです。

3. いいアイデアを思いつく材料の存在が造形遊びのポイントになります。そのために材料コーナーが材料ごとになるように整理しましょう。

4. 立派な作品をつくることよりも制作過程で想像力や発想力が活かされることを重視します。したがって、「こうしたら」と指導することはひかえましょう。

5. 「うまいね」とか「じょうずだね」という言葉は、技術的な側面を推奨する上から目線の言葉なのでここでは用いません。かわりに、「すごいね」という言葉を積極的にかけてみましょう。

6. 「がんばれ」という言葉は、「がんばりが足りない」と受け取り、意欲をなくしてしまふことがあります。かわりに「すごいね」「がんばってるね」「がんばったね」という言葉をかけるようにしましょう。

7. 小学校の図画工作科は、45分ですが、造形遊びワークショップでは、夢中になって1時間、2時間があつという間に過ぎて行きます。夢中になる時間を提供できることは、この事業の目的の一つですが、夢中になりすぎて失禁してしまう場合もあります。長時間にわたって活動している子どもには、「おしっこ大丈夫、早めに行っておこうね。」と時々声をかけましょう。

8. カッターナイフやハサミは使用しません。会場が広く、死角も多いため危険であるという判断からです。道具は、ガムテープ、セロハンテープ、ひもだけです。手で作るといふものづくりの原点に戻り、手、足、歯を使ってつくります。ただし、布やポリ袋を切ることができない場合のみスタッフのハサミを使えることにします。

9. 担当される日には、空き箱、布、牛乳パック、段ボール箱、プラスチック容器、新聞紙、アルミホイル、ひも、縄、紙袋、木切れ、枝、葉っぱ、松ぼっくり、どんぐりなど身近な材料をご持参ください。ご自宅のごみも減らせます。ただし、空き缶、ガラス瓶、石は、危険なため持ち込めません。

10. つくったものは、会場内のどこに展示してもかまいません。天井のバトン部分につきす場合は、図書館の脚立を使用し、スタッフが展示します。展示せずに持ち帰ることも自由です。展示する場合は、展示品引き取り期間（8月14日～18日まで）があることをちらしを渡してお伝えください。

11. 希望者には、その場で写真を撮り、2枚のうち1枚は、お土産に差し上げてください。もう一枚は、写真用展示ボードに掲示してください。

12. つくれない子どもには、無理につくらせようとせず、一緒に展示されている作

品を見て興味・関心をふくらませるようにします。他には「こうしたら」ではなく、「こういうのいいね」「こんなこともできそうだね」と複数の案を提示して選ばせるようにします。ポリ袋の風船で遊ばせることも一つの方法です。ポリ袋風船の中に入れる場合は、靴を脱がせ、走らないように口頭で注意してください。また、長時間にわたって中にいることのないように5分をメドに出させてください。破れた場合は、セロハンテープで補修します⁽⁶⁾。」

〈スタッフの皆様へお願い〉としたのは、ボランティアだけではなく、日替わりで担当となった県の職員に向けての心得であったからである。山梨県国民文化祭課の職員は、最終的に17名が配属されていたが、オープン・アトリエが開催される夏季になる頃には疲れがピークに達しており、体調不良を訴える者も少なくなかった。イベントのために土日出勤が続くこともリフレッシュできなかった原因であろう。こうした人たちに向けて、最低限理解してほしい支援内容を示したのがこの業務心得〈スタッフの皆様へお願い〉である。

この他に、当日は、

- ①「いらっしゃいませ」は、会話が続きにくくなるので、コミュニケーションが展開しやすい「こんにちは」というあいさつで出迎える。
- ②子どもと話す時は、子どもの目の高さと同じ目の高さで話す。
- ③腕を後ろに組んだり、胸の前で組んで立ったり歩いたりしない。



図24. 会期中盤の様子

手前が紙コップと積み木の積み並べるコーナー、奥が創作コーナーである。このくらいの人手と作品が参加する子どもには良好な状態である。実際には、この後並べられた作品で空きスペースがなくなり、混雑によって制作しにくい環境になっていく。



図25. 手作りのフライヤー

ファシリテータが茨城県近代美術館や東京都美術館などで開催した過去のワークショップの作品、山梨大学の専門科目「造形遊び」の作品を用いた。

ということなどを朝の開始前のブリーフィングで共有した。

4-7. 材料集め

造形遊びにおいては、材料を集め、種類ごとに材料をならべる材料コーナーの設置が重要な役割を担うことになる。材料を「みたく」、材料をもとに発想する活動が造形遊びだからである。しかも、その材料が、身近な生活経験と関わっていることが好ましい。いままで見たことも聞いたこともないプラスチック容器よりも、キャラメルの臭いが残るプリン容器の方が、材料としてより適している。そのモノと関わった経験が、発想や構想の能力に働きかけるからである。しかし、こうした生活材を手に入れることが難しい。学校教育なら、学級だよりを通じて、家庭で出た空き箱を集めて持ってきてくださいとお願いすればいいが、生涯学習、社会教育においては、容易なことではない。

今回の、オープン・アトリエに関しては、県の職員やボランティアに材料集めを依頼した。具体的には、段ボール箱、牛乳パック、紙製の空き箱、ペットボトル、ペットボトルキャップ、布きれ、ポリ袋、毛糸、木片、枝、葉っぱ、松ぼっくり、どんぐりなどである。造形遊びでは、この材料集めが活動の是非に関わることになる。しかし今回は、予想を大幅に上回る入場者だったため、会期の途中から、参加者にも材料の持参をお願いした。すると参加者が、毎日のように材料を両手に抱えて参加するようになり、これによって最後まで材料に困ることなく会期を終えることができた。牛乳パックの集まり具合が特に顕著であったが、山のような牛乳パックが午後にはなくなる日が続いた。「自宅から出るごみが少なくなって助かります。」という感想も寄せられた。



図26. 材料コーナー



図27. 持参した材料を手に入場前にならぶ子どもたち

4-8. 準備した用具

会場に用意した用具は、①セロハンテープ、②カラーガムテープ、③ひも、④キャップ付きハサミの4点だけである。道具ではなく、自分の手や足や場合によっては口を使って制作してほしいという意図が込められている。キャップ付きハサミについては、当初、会場エプロンを身に付けたスタッフだけが持つことにしていたが、需要の多かったポリ袋が、手や足や口ではなかなか切ることができず、また、多い時には、数十名が一度に創作コーナーに集まるということになったため、急遽、キャップ付きハサミを用意することにした。

カッターナイフは、広い会場の中を常時4、5人のスタッフで受け持つことになり、しかも大きな作品が多く、作品の内部や背後などに死角ができるため、そうした状況下でカッターナイフを用いるのは危険であると判断して準備しなかった。これについては、「カッターナイフありませんか」と会場内で問合せがあった際に、口頭でその都度趣旨を伝えた。のりやボンドやマジックについても施設の汚損を考慮し、また図書館側からの要請もあり準備しなかった。結果としては、30日の間、借用スペースの備品の汚損事故は1件もなかった。

用具とは別に創作コーナーの机には、前述のアンディ・ゴールズワージーの作品集⁽⁷⁾、マリリン・バーンズ『考える練習をしよう』⁽⁸⁾と、ファシリテータの著作である『ポリ袋でつくる』⁽⁹⁾を配置した。何をつくっていいか思いつかない子どもたちへのきっかけづくりのツールとして用意したものである。しかし、実際にワークショップが始まると、隣接する図書館の膨大な本棚から書籍をオープン・アトリエの会場に持ち込んで、それをヒントにして創作活動をする子どもたちが見られた。

例えば図28および図29の男児は、異なる日に別々に会場を訪れ、それぞれ恐竜をつくりたいと考えたが、どういう姿だったかが思い出せず、図書館の本棚から恐竜の図



図28. この本を見てつくったんだよ



図29. ティラノサウルスとなぞのサウルス

鑑をワークショップ会場に勝手に持ち込み、それを見ながら牛乳パックとガムテープで恐竜スピノサウルスやティラノサウルスなどを制作した。こうしたことを考えて実行した子どもは、他に何人もいた。

途中からは、「ベンギンって、どうなってたんだっけ？」とたずねてくる子どもには、「図書館の本棚をさがしておいで」と言って対応することにした。これは、予想もしない展開であったが、今後、図書館でワークショップを実施する際の有力な利点の一つとなるであろう。同様に小学校の図画工作室にも図鑑などを並べた情報コーナーを設置することを考えるべきであろう。

4-9. 失禁事案

オープン・アトリエでは、長時間に渡って制作に夢中になっている子どもが、トイレに行くのを遅れて失禁してしまうことがある。フロアの養生をすべき根拠ともなっている事柄である。

制作スペースとなったイベント・スペースの東面には、ポリエチレンシートで養生した上にパンチカーペットを敷いたが、西面の「積む並べるコーナー」は、布製カーペットがむき出しであった。そのため積み木が崩れた際の消音効果や失禁対策として、部分的にジョイント式コルクボードを敷くことにした。実際に、オープン5日目に小学生男児が制作に夢中になってトイレに行くのが遅れ、失禁するという事態になったが、コルクボードの上だったために、カーペットを汚損することはなかった。保護者によると、この男児は、図書館の一般閲覧室でも以前に失禁したことがあり、夜尿症の服薬治療中であった。しかし、この事態を見て県の担当職員は、西面の「積む並べるコーナー」を閉鎖し、展示スペースにしてしまった。これによって参加者も減った。ファシリテータは、図書館の担当者や国民文化祭課の担当職員と協議を重ね、トイレへの誘導を声掛けで促すこと、張り紙を出すことを条件に失禁事案から5日後（7月29日午後）に西面の「積む並べるコーナー」を復活させることになった。

4-10. バックグラウンドミュージック (background music) : BGM

学校教育における造形遊びの授業では、図画工作科の観点別学習状況の4観点の一つである発想や構想の能力が重要となるが、発想や構想の能力を支援するためにBGMを用いることがある。今回のワークショップにおいても、会場全体に流れるBGMとして、次の5枚の音楽CDを用意した。いずれもファシリテータが実際に指導した小学校図画工作科の造形遊びの授業や美術館のワークショップなどで用いられてきた実績のあるCDである。

①アディエマス『ベスト オブ アディエマス』Virgin Records Ltd、VJCP-68177、1999年。

- ②Bob James Trio 『Take It From The Top』 ビクター エンタテインメント株式会社、VICJ-61139、2003年。
- ③『自律神経にやさしい音楽』 株式会社テラ、DLMF-3906、2007年。
- ④ペンギンカフェオーケストラ 『Preludes Airs & Yodels』 Virgin Records Ltd、7243 842015 2 4/AMBT15、1996年。
- ⑤『効果音ダイジェスト』 日本コロムビア株式会社、COCG-7631、1991年。

当初は、この5枚のCDを無作為に順に流していたのだが、会期の中ほどの時期にボランティアをしていた大学生が、アップテンポの曲が多い②Bob James Trio 『Take It From The Top』を流している時に、子どもたちの活動が乱暴になり、他の子どもの作品を壊したり、走り回ったりする傾向があると言い出した。そこで、スタッフが複数で観察してみることにしたのだが、確かにそうした傾向が確認された。また、他のCDをBGMにした場合にも、子どもたちが暴れる事例がいくつか確認された。例えば、⑤の『効果音ダイジェスト』には、乗物の音、波や雨などの自然の音、動物の鳴き声などが収録されているが、ジェット機の轟音や雷の音、ライオンの鳴き声の際に、子どもたちは興奮して活動が止まってしまうことがあった。子どもたちが乱暴にならず、集中力を発揮し続けたのは、③の『自律神経にやさしい音楽』と④の『Preludes Airs & Yodels』であった。そこでそれ以降は、③、④のCDを中心にBGMとすることにした。いずれも歌声がないインストゥルメンタル instrumental 作品である。

4-11. 展示

展示に際しては、壁際に机を配し、自立しない作品は、壁に寄り添わせて展示した。壁際に背の高い作品を展示し、手前に背の低い作品を展示した。部屋の中央に展示スペース（島）を配し、島の中央に背の高い作品を展示し、手前に背の低い作品を展示した。壁には平面的な作品を、また天井からは自立しない立体作品を吊るした。



図30. 展示期間の様子



図31. 作品写真の展示ボード

本来は、前日までの様子をモニターに上映して、会場で流す計画であったが、肖像権の問題が解決できないため実現しなかった。その代替措置として、作品写真の掲示ボードを設置した。子どもがつくっている間、掲示ボードの写真に見入る母親や祖父母の姿は、毎日の見慣れた会場風景となった。また、何をしていたかわからない子どもは、とりあえず掲示ボードの友だちの写真を見て考えているようであった。

8月14日～8月18日までは、展示専用期間とし、同時に展示作品の引き取り期間としたため、日ごとに展示作品は減少していった。展示期間中には、次のような文面を入口に掲示した。

「ここにあるのは、7月20日～8月13日の25日間にこの場所で子どもたちがつくった造形遊びの作品の一部です。子どもたちの想像力を感じてみてください。」

作品については、まちなかに展示することも検討したが、許可がおける適切な場所がなかったため、イベント・スペース内のみとなった。大きな作品をつくった子どもたちの大部分は、作品の出来映えに満足し、家族に見せたいと言って持ち帰った。徒歩や電車やバスで大きな作品を運んで持ち帰ることでこれが広報となった。

「昨日、電車で大きな恐竜と一緒にいる子どもがいて、図書館でつくれると聞いたので来なんです。」

と言って訪れる親子もいた。まちなかに展示することは実現しなかったが、持ち帰る途中の作品がまちなかに展示すること同様の効果をもたらしたことになる。

5. 活動の評価

生涯学習活動や社会教育活動は、やりっぱなしで終わってしまうこともあるが、その評価は欠かせないものである。ここでは、数量による定量的評価と質的な定性的評価によってオープン・アトリエ・ワークショップの評価について検討する。

5-1. 定量的評価

(1) 来場者数

今回の国民文化祭の山梨県における経済波及効果は243億円であった。その算定基準となる来場者数であるが、国民文化祭全体では、県内外から284万人を越える来場者があった⁽¹⁰⁾。

それに対して、30日間のオープン・アトリエの総来場者数は、5,670名であった。1日あたり189名になる。しかもこの5,670名は、単なる観覧者ではなく、ほとんどの場合、滞在時間が数時間にわたる長時間滞在型のワークショップの参加者である。最後の5日間は、つくることができない展示期間であるため、来場者が少なくなっているが、日数の経過とともに来場者が増えていることがわかる。

今回のワークショップは、近隣の定住者を対象としており、交流人口の増加に成果を上げたとは言いがたい。公立図書館という施設の特徴として、観光客が立ち寄ること

表1. 日時ごとの来場者数

	10:00～	11:00～	12:00～	13:00～	14:00～	15:00～	計
7月20日(土)	13	15	28	27	35	35	153
7月21日(日)	35	36	38	35	60	39	243
7月22日(月)	8	5	3	10	4	8	38
7月23日(火)	8	11	12	12	20	15	78
7月24日(水)	32	25	33	27	17	13	147
7月25日(木)	14	30	23	34	14	12	127
7月26日(金)	23	13	20	13	26	28	123
7月27日(土)	32	43	25	15	66	44	225
7月28日(日)	40	15	19	22	25	24	145
7月29日(月)	13	9	16	33	11	3	85
7月30日(火)	18	27	12	29	55	24	165
7月31日(水)	30	21	14	22	52	26	165
8月1日(木)	10	33	22	30	21	41	157
8月2日(金)	35	42	23	20	21	33	174
8月3日(土)	28	49	23	25	48	23	196
8月4日(日)	39	68	51	72	65	42	337
8月5日(月)	30	10	16	20	22	27	125
8月6日(火)	54	30	23	24	76	17	224
8月7日(水)	65	46	44	46	53	25	279
8月8日(木)	42	41	52	53	41	24	253
8月9日(金)	62	55	17	12	49	8	203
8月10日(土)	50	52	20	72	78	52	324
8月11日(日)	41	35	33	53	67	37	266
8月12日(月)	44	29	34	35	34	27	203
8月13日(火)	61	42	43	69	49	40	304
8月14日(水)	38	35	24	28	30	23	178
8月15日(木)	26	26	36	28	39	45	200
8月16日(金)	25	38	26	18	27	59	193
8月17日(土)	20	18	17	20	48	45	168
8月18日(日)	42	30	6	38	36	40	192
合計	978	929	753	942	1189	879	5670

※ 会期中（2013年7月20日から8月18日まで）の1時間ごとの来場者人数である。

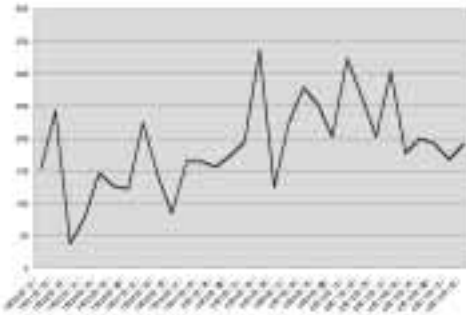


図32. 来場者数の経緯

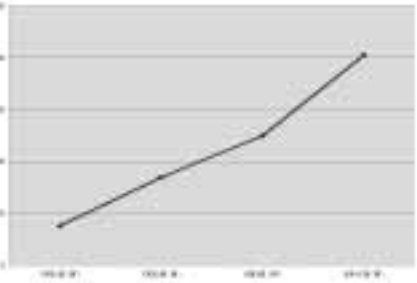


図33. 月曜日ごとの来場者数

は期待できないからである。確認はできないが、実際に遠方からの参加者はわずかであったと思われる。まれに千葉県からわざわざ訪れたNPOの代表者や東京品川区から訪れた教員などがいたが、彼らは、ファシリテータが、メーリングリストに書き込んだオープン・アトリエの記事を見て訪れたという人たちであった。

時間帯については、12:00から13:00の間が最も来場者が少ないが、昼食のために自宅に一旦帰宅する子どもたちがいたためである。イベント・スペースの隣に昼食がとれるカフェがあるが、オープン・アトリエの利用者の中でここで食事をする人は少なかった。座席数が少ないため席がとれないこともあるが、近隣の住民の割合が高く、歩いて帰宅できる範囲に居住する来場者が多かった証でもある。

(2) 月曜日の来場者数

月曜日は、山梨県立図書館の休館日だが、月曜日の度に現状復帰することはできず、借用料を支払うことになる。関係者からもったいないという意見が出て、月曜日でもオープン・アトリエを開催することになった。他のスペースが、閉まっているため来場者は、少なかった。1ヶ月間の会期中に月曜日は4日あったが、最初の月曜日の来場者は、わずか38名であった。しかし、月曜日も開催されていることが口コミで広がり、最後は203名となり、1日平均の189名を上回った。

5-2. 定性的評価

日本における公立文化施設は、文化会館、博物館、図書館、劇場、公民館などが法的にも整備されているが、地域振興に効果を発揮しているかという点に甚だ疑問である。莫大な借金を生み出し、閉館する施設も珍しくない時代となった。しかし、こうした施設の評価を入館者数や収益などの定量的評価によって判断することには無理がある。小学校は、莫大な税金を費やしているが、誰も文句を言わない。直近の経済的対価がなくとも社会的、精神的対価があることを議員や一般市民が認識しているからである。公立文化施設も学校教育と同じように、社会的、精神的対価が存在すること

を示さなければならない。そのために定性的な評価は不可欠である。住民の参加・交流を促す文化芸術活動には、コミュニティを再生し地域に活力をもたらす効果が期待される。地域活性化を論ずる際に、経済的対価ばかりが重視されがちであるが、住民の精神的対価（満足感など）は、忘れてはならない要素である。

会期の終盤の5日間に限って会場の一角に自由記述式の感想シートを置いて、感想を記述してもらった。以下にその内容のすべてを示す。

- A：子どもたちの創造力にはすごくおどろかされます。展示されている作品を見て本当に元気になりました。
- B：いいこと考えたってどういう意味だろうと思いましたが、息子たちと2時間ほどここにいて、何人かの子どもが本当に「そうだ、いいこと考えた」と言うのをきいてなっとくしました。私もやってみたくなりました。(父)
- C：図書館がこういうさわがしいことをやっちゃうことがすごいと思います。できれば1年中毎日やってください。
- D：うちの子がこんなに夢中になっているのをはじめて見てしあわせな気分になりました。なにをやってもすぐにあきらめてしまって続かないのであきしょうだと思っていたので。ありがとうございます。
- E：日本のこどもはすごいです。(夏休みに子どもたちといっしょにアメリカから里帰りしました。)
- F：国民文化祭いつでもどこでも造形遊びオープン・アトリエに子どもたちと何度も足を運びました。とっても楽しく、だんだん作るものも大きくなり今日は段ボールと牛乳パックを使ってかいじゅうを作っていました。それをどうしても持ってかえるといっています。
- G：子どもにとっては、自由に考え、作り、本当に楽しそうです。長い休み(夏休み、冬休み、春休み)のたびにイベントしてほしいです。
- H：子どもたちには、とても楽しい夏休みになりました。こんなに夢中になったのは多分はじめてです。ありがとうございます。ぜひ来夏も企画してください。
- I：毎日4時に終了してしまいましたが、まだ暑いので、せめてすずしくなるまで終了時間を遅らせていただきたいです。晚ご飯の準備をころまでなんとかならないでしょうか。
- その他に、ボランティアが、参加者の発話を書き留めた記録がある。
- J：「こんな楽しいところがあったんだね。」(帰りぎわに女の子がお母さんに)
- K：男の子が「紙コップがなくなった。」と言うと他の男の子が「ぼくの使っているよ。」と言って紙コップを渡し、一緒につくり始めた。
- L：牛乳パックでつくっていた女の子が、「いいこと考えた。わたして、なんでもできるね。」とつぶやいていた。

M：毎日、朝起きたら「ママ、今日も図書館に行ける？」って聞くんですよ。

N：「1年中やってもらえないですか。」（会期の後半に常連の小学生のお母さんが受付で話す）

O：家のいらぬものを持ってくるので、家のごみが減って助かります。

否定的な感想はなかったが、この催しが国民文化祭の催しであることを明確に認識していたのは、Fのみである。中には、Cの意見のようにこの事業の主催者は、図書館であると受け取った人も存在していたようである。

また、感想を書いたり、意見を言う入場者には、F、H、I、M、N、Oのようにリピーター、特にハードリピーター（常連客）が目立つ。コアターゲットとした地域住民のリピーターの獲得に成功したようである。実際に創作期間の25日間、オープン・アトリエに毎日通い詰めた主のような子どもが1名いたが、この女兒には、ワークショップの最終日にスタッフから皆勤賞の手作り金メダルを授与した。

「大人になって子どものころを思い出す時、この子は、きつとここでのことを最初に思い出すと思います。」

お昼ご飯時に、毎回のようにこの女兒を呼びに来ていた母親の感想である。1名だけではあるが、こうした子どもが存在していたということが、この事業の定性的評価内容となり、事業の開催意義となる。

また、Iの意見にあるように、午後4時にオープン・アトリエ・ワークショップが終了してしまうことについては、会期中に何度も理由をたずねられたが、最初に支援ボランティアの時間帯ごとのシフトを組んだ際に、4時以降の時間帯に対応できるボランティアが極めて少数であったため、4時以降の開場を断念し、4時で終了せざるを得なかった。スタッフの配置に関わる理由である。これがなければ、終了時間は5時でも6時でも問題がなかった。しかし結果として、この終了時間が子どもたちを各家庭に5時までには帰宅させるという地域の習慣に合致することとなった。

終了後は、毎回30分ほどかけて床に落ちている材料の切れ端などを掃除したが、図書館の近所に住む子どもたちは、毎回、自主的に片付けを手伝ってくれた。サッカー日本代表の国際試合の終了後に、ポリ袋を手にはスタジアムのごみ拾いをする日本のサポーターたちの活動が、海外メディアに取り上げられることがあるが、誰かに言われなくても自主的に片付けをする日本の子どもたちの姿はここでも日常的に目にすることができた。

また、今回の活動には、夏休みの帰省中に新しくできた山梨県立図書館に立ち寄ったという参加者や、首都圏に在住するいわゆる二地域居住者が孫を連れて立ち寄ったという参加者が目立った。山梨県は、田舎暮らし希望地域ランキングで上位に位置する（2014年度は全国1位）という好条件もあり、山梨県内の市町村には、田舎暮らしや二地域居住の専門部署を有するところも少なくない。こうした人たちは、文化芸術と

関わるができる環境整備や生涯学習の利便性を重要な観点に掲げており、今後は、こうした市町村と協働して同趣旨の事業を開催することを考えていく必要があるであろう。

生涯学習における地域活性化活動には、地域型活動（町内会・自治会等の地縁団体による活動）とテーマ型活動（NPO、ボランティア組織などによる活動）がある。組織面・活動面のそれぞれにおいて特徴があり、両者が補完することによって地域社会全体の地域力を向上することが期待されているが、以上みてきたように、今回の活動は、両者を同時に取り込むことを意図した活動であった。

6. 総括

6-1. 今後の課題

(1) 経費の問題

今回の活動に対しては、国民文化祭の主催事業の一つということで予算があてがわれ、実践することができたが、こうした特別な補助がない状況においては、イベント・スペース会場借用料1日21,500円（9：00～21：00）×30日＝645,000円と養生費1,200,000円の合計1,845,000円が最低でも必要となる。これは、見返りが期待できる場合の民間企業であっても甚だ厳しい条件であろう。人が集まる市街地であればあるほど会場借用料は高くなり、経費はかさむことになる。

また最近では、家庭用のプリンターでフライヤーやポスターが簡単に印刷できるようになり、印刷関連の広報費は、格段に安価となったが、ウェブ上の広報に関しては、経費が不安定な状態が続いている。安価で効果的なものもあれば、高価でも汎用性の期待できないものもある。公民的な活動の場合には、行政が管理するウェブサイトの情報公開するなどの措置を検討すべきである。

そして最も大きな問題は、床がカーペットであったことである。床がカーペットであることによって、消音効果や断熱効果など様々な利点があることは確かだが、同時に利用内容を制約し、養生費が発生することになる。今後の文化施設の計画は、こうした点も踏まえて総合的にデザイン計画を検討する必要がある。また、借用料の発生しない中心市街地の空き店舗などを無料で借用して事業を開催するなど、効果はそのままに、しかし経費の削減を実現して、費用対効果を向上させる必要があるだろう。

(2) 人材養成の問題

地域活性化やまちづくりは、施設を建設したり、道路を広げたりすることではない。道路をつくることは、まちづくりではなく、街づくりである。まちづくりは、人のつながりやネットワークをつくることである。そこでは、人と人をつなぐコーディネ

ネーター coordinator やアドミニストレーター administrator の存在が重要となる。しかし、こうした人材育成のシステムが整っていない。今回は、国民文化祭という特殊な状況であったため、山梨県が時限的に設置した国民文化祭課の職員がコーディネーターやアドミニストレーターの役割を果たしたが、今後は、人と人をつなぐ役割を果たすコーディネーター的人材の育成が不可欠となるであろう。

(3) 評価の問題

税金の投入の有無にかかわらず、すべてのステークホルダーを対象とする評価活動は、現在の生涯学習活動・社会教育活動の必須要素である。しかし、少子高齢化による人口構成の変化を考慮して評価に反映させるためには、高齢者や子どもをサービス対象として特定化した評価指標を設けるなどの工夫が必要であろう。

また今後は、定量的評価と定性的評価を総合化し、総合的なシステムとして評価活動を行うことや、感性アナライザなどの機器の導入などによって、関心や意欲を測定することも考慮すべきである。精神的対価や満足感は、いまや計測可能な時代を迎えている。これによって、文化審議会の言う文化芸術の社会的機能や生涯学習機能を客観的に評価することができるようになり、社会的な活動を計画する際のエビデンスが得られることになる。

6-2. まとめ

造形遊びは、自己肯定感を育むという考えがある。自己肯定感は、自信を持つ心などと誤って解釈されることがあるが、「自分が存在すること自体に意味がある」と考える心の状態である。能力を認めるのではなく、「生まれてきてくれてありがとう」のように存在自体を認める言葉掛けによって育つとされている。他人と比較するのではなく、自分が存在することに対する絶対的な評価は、自己肯定感を育む上で欠かすことのできない観点である。造形遊びは、人と比べたりせず、自己表現に没頭することで、自己実現を達成することができる。つくり終えた子どもたちの表情には、充実感が満ちていた。しかし、この主観的な印象を客観的データで示すことができなかった。

文部科学大臣及び文化庁長官の諮問機関である文化審議会は、これについて、最近、次のような見解を示している。

「文化芸術には、個人の抱いている情熱や感動を創造的に表現することで自らが『生きて』いることを実感させる力がある。また、他人が表現したものに共感し、互いにコミュニケーションしながら協働の関係を作り、あらゆる人を社会に包摂していく力があることも、いくら強調してもし過ぎることはない。さらに、先端技術の研究開発や企業のイノベーションに必要な『ひらめき』の能力を育ててくれるのも文化芸術である。そして、文化芸術が求める自由な発想は、人が陥りがちな『思い込み』や前例

主義、横並び主義といった固定観念のくびきから、人を開放してくれる。これこそ、変革の時期に、一人一人に要求されるモノである。(中略)文化施設は、地域の人々が様々な活動を通じて、人間関係を構築・保持したり、多くの人々に対して社会参加を促したりする場として社会包括的な機能を果たしていくことが求められている⁽¹¹⁾。」

「自らが生きていることを実感させる力」という部分が自己肯定感ともつながっている。文化審議会が「文化芸術が有する力」について示した内容であるが、地域における文化芸術活動の蓄積によってこうした見解が示されるようになってきている。

今回は、中心市街地でオープン・アトリエ型ワークショップを開催したが、ここで行われた子どもたちの創作活動は、学校教育とは範疇を異にするまぎれもない生涯学習活動、社会教育活動である。何時間も一つの作品をつくるために費やすことは、今の学校教育には不可能である。本来は、家庭教育や地域での遊びが担うべき機能であるが、地域から失われてしまった環境を今回は意図的に設定した。

中心市街地における文化施設の役割の一つは、地縁社会ほど強いつながりではなく、無縁でもない、その中間的なもう少し出入り自由なつながりを緩やかな共同体として結びつけていくことである。文化施設は、ハードウェアとしての「街づくり」に貢献しているが、人の活動がもたらすソフトウェアとしての「まちづくり」の方がより重要である。今後も人のつながりを意識した文化施設のソフトウェア開発が期待される。そしてその際には、地域住民やテーマ型組織に計画段階から参画してもらうことが、その後の活動の成否を分けることになる。

またこうした活動は、アウトソーシング手法の導入と深く関わることになる。実際に相当数の事業が新しい公共経営手法 (New Public Management) の考え方を基本におきながら、コストの削減、行政サービスの効率化、民営化の推進などに取り組んできたが、行政が担当することが困難な領域や分野が増加してきている。子育てや教育もそうした分野に位置付けられる。それを補うのが、大学などの高等教育機関、専門家集団としてのNPOとの連携、地域社会が抱える地域資源(人材、財源等)の活用である。ただし、今回の活動を支援したボランティアは、大学生を除けば大方が高齢者であった。人口減少社会と少子超高齢社会の進展は、地域社会の担い手の不足、高齢者への依存、担い手の固定化を招くなど、地域コミュニティの機能低下を招く要因であることが指摘されているが、例えば創作する子どもと支援する高齢者の異年齢交流ができるなど、こうした状況をネガティブに捉えるのではなく、ポジティブに受け止める考え方や方法論が期待される。

山梨県で開催された国民文化祭において、造形遊びは重要な役割を担ったが、その後開催された第29回国民文化祭・あきた2014において、造形遊びという事業は存在しなかった。第30回国民文化祭・かごしま2015も同様である。造形遊びが山梨県だけ

の単発的な活動に終わらないためには、活動の評価と検証が意味を持つことになるであろう。この報告は、そうした意味を持つものである。

まだ三分の一の都道府県が国民文化祭を開催していないが、引き受ける県がなく、開催地がなかなか決定しないという事態が続いている。徳島県は、2007年の第22回大会に続いて2012年の第27回大会を開催したが、山梨県も、もう一度短期開催で国民文化祭を開催することに挑戦するべきである。短期開催と比較することによって、303日間という長期開催をしたことが、日常のかつ継続的な文化芸術活動につながっているのかをより詳細に検証することができるであろう。

未曾有の災害に見舞われても自然界では、いつもと同じように春には桜が咲き、秋には稲穂が頭を垂れた。それは、ケ(藝)である日常の活動が育んでいるものである。人間も花(イベント)というハレ(晴れ)を求めるのであれば、日常的な活動を重視するべきである。これによって初めて生涯学習や文化芸術の花は咲くのである。

註

- (1) 筆者は、山梨大学教育人間科学部生涯学習課程の担当教員として、当時の横内正明山梨県知事が設置した甲府駅北口の再開発を検討する高度情報エリア整備懇談会の委員、第28回国民文化祭企画委員会委員、第28回国民文化祭造形遊び部会長、第28回国民文化祭おもてなし部会委員、そして今回のオープン・アトリエ・ワークショップの企画者兼ファシリテータとしてこの事業に携わった。また会期中は、山梨県国民文化祭課職員、山梨大学美術教育研究室の新野貴則准教授、国民文化祭のボランティア、山梨大学・山梨学院大学・山梨県立大学・身延山大学の学生ボランティアの支援を受けた。
- (2) 国体の場合、1993年の東四国国体(香川県・徳島県)のように、近隣の2～4都道府県が共同開催することもある。
- (3) 板良敷敏『『造形遊び』という名の学び その意味をめぐって』『美育文化』第52巻第5号、2002年、pp. 13-21。
- (4) 中澤さかな『道の駅「萩シーマート」が繁盛しているわけ』合同出版、2012年、Pp. 191。
- (5) 栗田真司『生涯学習としての『博物館における教育普及活動』』『山梨学院生涯学習センター紀要』第17号、2013年、pp. 45-73。文中の「3-3 身近な地域やリピーターを対象」に関連する記述がある。
- (6) 『第28回国民文化祭2013 オープン・アトリエ運営マニュアル』第28回国民文化祭山梨県実行委員会、2013年、p. 7。
- (7) アンディ・ゴールズワージー『ふたつの秋 TWO AUTUMNS』栃木県立美術館・世田谷美術館、1993年。
- (8) マリリン・バーンズ『考える練習をしよう』晶文社、1985年。
- (9) 栗田真司『ポリ袋でつくる』大月書店、1992年。
- (10) 『富士の国やまなし国文祭 成果検証報告書』第28回国民文化祭山梨県実行委員会、2014年。

- (11) 『最近の情勢と今後の文化政策～東日本大震災から学ぶ、文化力による地域と日本の再生』文化審議会文化政策部会提言書、2012年、p. 8.